



日本山海名物圖會

P
283
1

逍遙文庫
文庫6
2154
1





画工長谷川光信

編者平瀬徹齋

日本山海名物箇會



陸奥守從五位上百濟王敬福郡

内少田郡仁黃金在卜奏此獻此遠聞食敬伎

悦波給布世

大伴宿禰家持

皇代承代さ久んと東なりみちたしく山

去りてを嘆 金寶之盡さる姫氏國神邦

文庫6
2154
1

聖帝之民如沸德十子世を頂さるる何
ら一民侶之營日ふ由有又好而樂而
耽於有耽てなるはと云事なり既小成也
日本山海名物圖繪号這之平瀬氏徹齋翁
日小編に夜に緝おひく古人古人之癖
を愛せたるふく強て子之手を執る
是をといひ緝たふは阿子小母孝子先考

之心を繕く雨意を穀を借閑一亭
たぐ一なり風月之道清老流心片とて
井也又思小雙林一僧若種之妙と陸氏を
歎き宴タユマス沸募く禪指空負徳句幸記之
千世弟代印ん柢のそまら且天平二十一年
二月丁巳東方異邦官人不眠福建一棧春
一魚一以子有余載杖桑時今治世不常

知之者且暮遇之

一箇車辞ス小月何ニ主人只恁ニ乞小ニに
心裏おろく蒲柳ヲ暮くニ撓テ

八十寢半時庵

撰

皆寢曆四年季夏一旬



日本山海名物圖繪目録

卷之一

けまをい今浪洞終と海は一級始終と委く
まろはわと今二二海うの物終るりり

金山堀口の圖

鋪口 下賦

真府

銅山法池渡方の圖

本國の産物
銅山の池端

洞山船泊

鋪口 下賦

床家

山後役人

金山法通具

鋪口 下賦

かきき

かみませ

さかい大と

碎雄

あぶ

あさり

あさり

あさり

金山浦口

風まり 大切口
けまろ

金山浦の中れ繪



白石くたく繪

山神茶

洞山床家

鉛

金山淘法の繪

鉄山の法

灰吹

根山淘法の法

登家の繪圖

高輪大工所作

南蛮鞆

鉄踏鞆

洞山ふた合液一方

巻之二

緋青緑青製法

精製法

豆湯の掃

扱人

揚州才津干瓢

茶製法

焙毫

江戸四日市蜜柑市

緑茶製法

大和湯所掃

炭焼圖

材木流し水圖

宇治茶摘

茶名取

紀伊玉蜜柑

近江曼草

尾張大根 江戸移りま大根
掛列倉橋大根
掛列河口大根

卷之三

日光信梳 心越所の房
るれ重実の房
とくりくろの房

越前福井石橋 甲斐石橋
新赤井書
くろいけの房
とくりくろの房

椽脇製法 本文章
信村製
信村製

池田岩 信吉浦干
白くろの房

堺尾丁 山上文庫
信吉浦干
白くろの房

京西陣織 細布の
五とろの房
信吉浦干
白くろの房

掛列平野館 地蔵
天王寺下
本付今文の房
又今文の房

豊後河太所 豊後河太所
くろいけの房
大坂瓦屋
瓦のゆりの房
くろいけの房

塩漬 塩漬
藤摩大所
馬砂糖
白砂糖

大坂小濱糸市 正糸市
信吉市
信吉市
信吉市

卷之四

信吉室市 九月十日
三編索
長介信吉の房
とくりくろの房

伊豫牛房 八岐牛房
松本昆布
若狭昆布

松烟 松烟
加賀益
掛列白糸

天王寺牛市 徳田佐中よりのがり
牛の市と云ふ

安藤宮内市 二月
六月

有馬菴 弦河竹細工

伊吹艾草 花をあらり糸の
うりぐこのより

仙臺紙子 そか流しより作り
紙子の市と云ふ

石巻寺干飯

巻二五

河櫃 川海をとりすふん
水とほよあつりり

京深草土忌 かりうけの故実
と云ふ

文島松糸 六月
七月

寺良物 本津物

河内小園扇 あまねら
花より

天満松茸市 法衣たすのは
りとうり

八月枯結 結の
一級結と

淀籠 淀の舟車

白船 河船
海船

尾崎多貝

海人 男あま
女あま

鰯網 伊藤
徳川舟

鯨 鯨をたはして大ごと
はゆきし平ひして
徳川舟より作り

鯨をす見

鯨実の舟

瀬田纒織 日向の
大纒織

蛸貝 しごと
と云ふ

章魚 小八指魚
望波魚
石巻

桜魚兒

赤鯉 赤
海魚

鯨汐と吹雪

鯨引舟

鯨在網



金山の堀口の圖
 金山の堀口を舗りしも又ハ其處よりハ昔日を多クハ
 作らしめし金銀細工師して金山といふ我れハ金山といハ
 人王に十六代天皇天武天皇御宇中ノころハ
 出と御決ハ神代より御く公使より

山の手法
 かゝる

おあしり
 あしり



銅山 飛治
 補の 中 飛 治
 次 子 捨 治 あり 又 舎 下 へ
 山 の 役 人 あり あり
 谷 後 人 康 家 山 後 人 徳 治 飛 治
 谷 大 工 山 吹 大 工

金山浦の中は
 浦より暖かく入ると、あつとに、山浦の狭い
 ところまで、大石のつれぬき、すすく、下流の
 まをつつみ、橋をたつた、つれぬき、すすく、下流の
 て、おぼろ、大石、あつと、つれぬき、すすく、下流の
 又、あつと、つれぬき、すすく、下流の
 をあつと、つれぬき、すすく、下流の

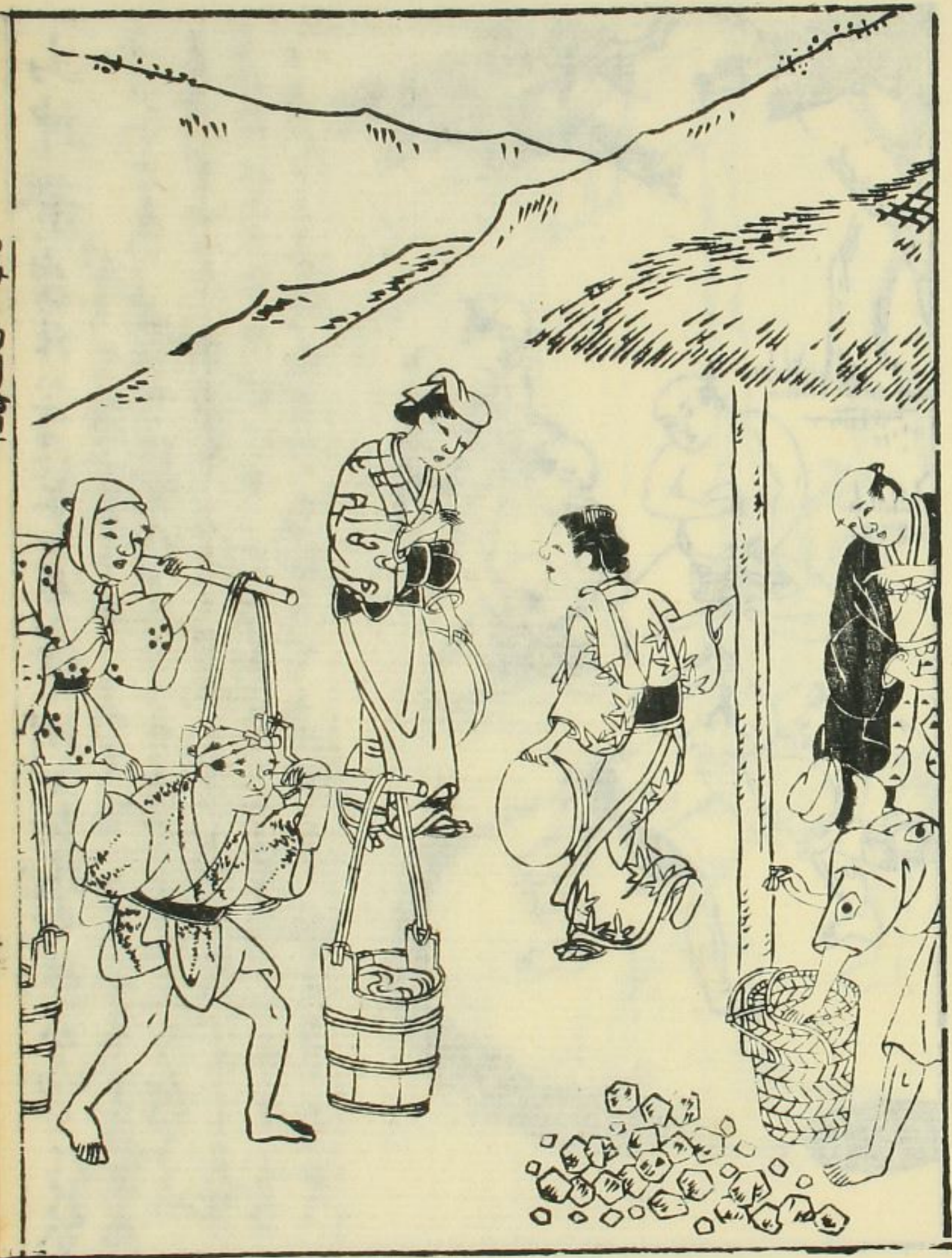


金山浦の中は

〆



鉛石をくく給
 ぶらりありありと鉛石をもちあつてちんちん
 こむとくまんとおぼよその楯をうもつらと云こ
 細とくくいおぼくおの楯なり石を入れて背願うつおとあやと
 小ぶの正字いままの漢字いど又くも鉛の字正字よあくと鉛の
 金鉛鉛鉛のくくなり字彙いまく鉛古猛切音礦金浪浪
 球也とありなま字ハ鉛あるハ

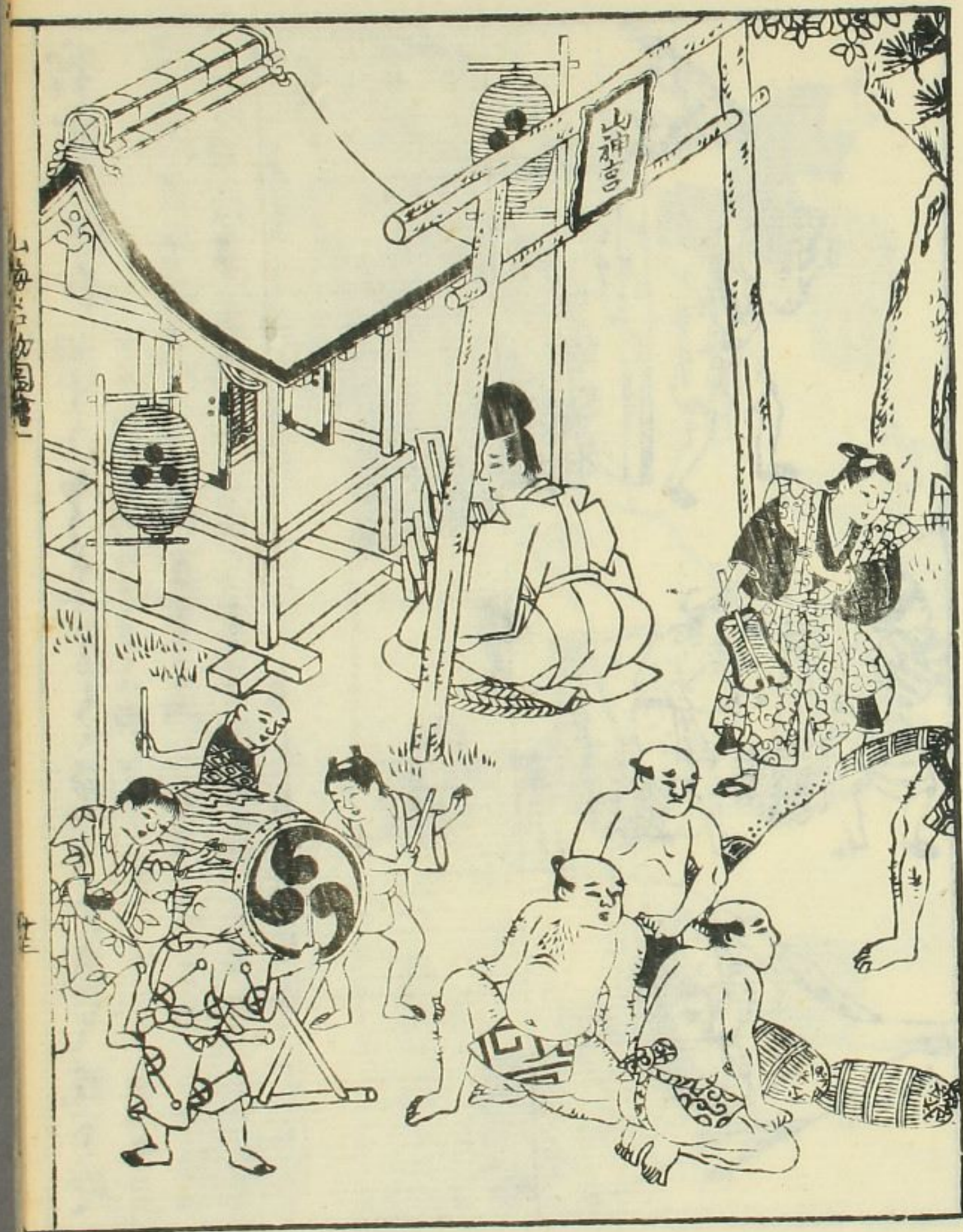


銀山淘法の繪

銀山の石上の後まあるく打たれて粉と
 ありてあまて中へ金山の板ゆりのどろり
 桶よりあを汲へるあつとすいませるにて
 ぬれは石の管す切替の
 ほどあり

山崎名物圖繪

十



山神祭



山神祭
 山の神は口に赤と黒をまじりて社を齋庭と申すおのくれは
 によりてまじりたるはまじりたるはまじりたるはまじりたるはまじりたるは
 まじりたるはまじりたるはまじりたるはまじりたるはまじりたるはまじりたるは
 来訪の男共さんいよとれをわらうは法あさんいよとれをわらうは法あさんいよ
 りひ法社の大徳さんいよとれをわらうは法あさんいよとれをわらうは法あさんいよ
 とまのすまふさんいよとれをわらうは法あさんいよとれをわらうは法あさんいよ



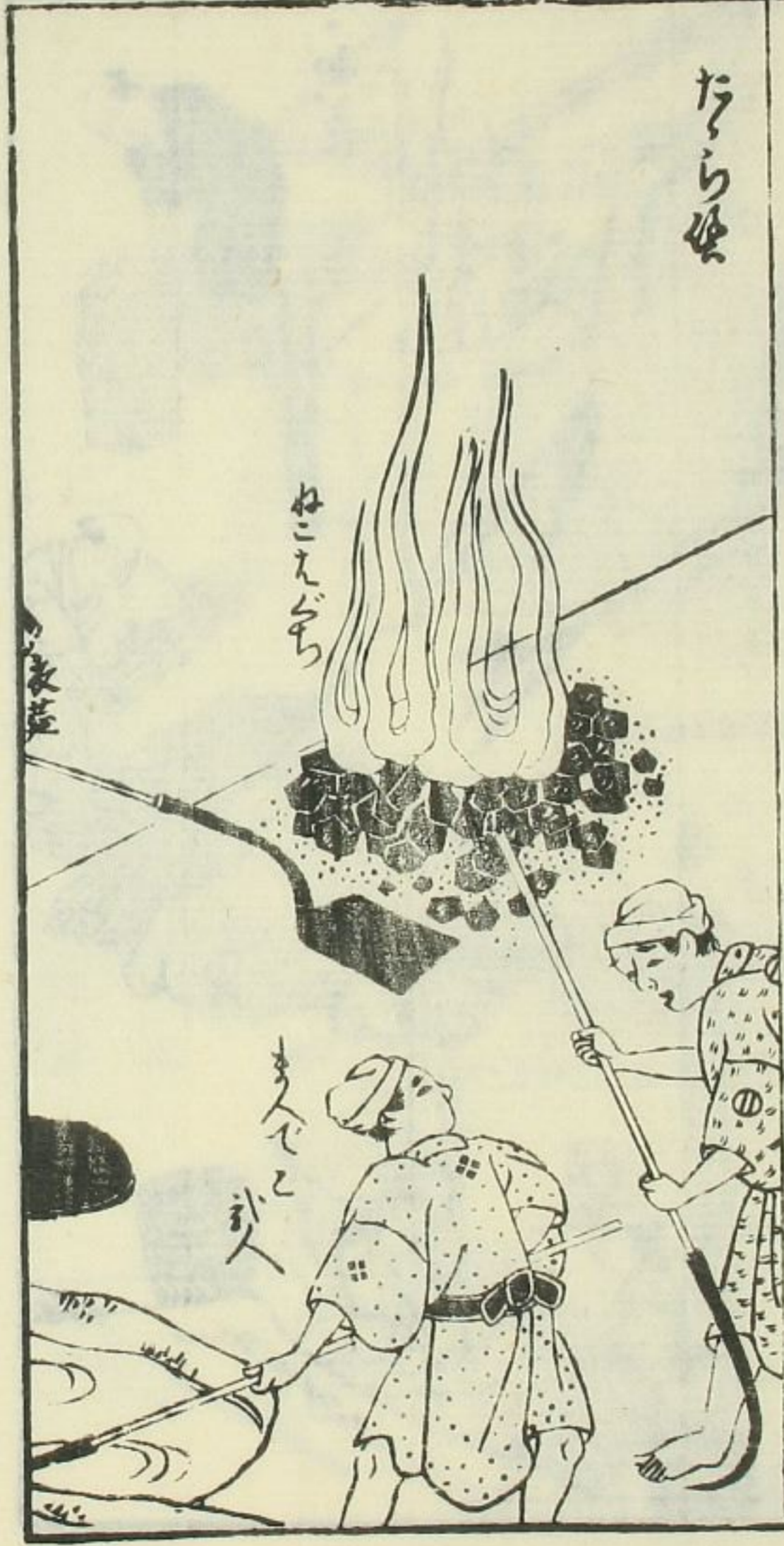
かま

焼



焼

谷家の焼
 洞よりありて...
 又... 律歴志...
 して... 洞...
 あ... 洞...
 ...



洞山床家
 谷家にて焼く方を糸を湯まわして丸鋼はあがら
 ず床家にて焼く鋼を湯まわすと時鋼は今吹いでるを
 くるまうといひ又そのまわりの湯のいろをどきりとまてこ
 石の湯とたたら火をまわらぬといひ又どきりまわらぬといひ
 糸とあがるとどきりといひあり



鉛
 説文のいづく鉛は金あり湯の煎くすの管のい
 しく山の上の鉛あればその下は銀あり山の上は銀あれば
 その下は丹ありといふは丹の丹砂をいふやうの煎のいづく金管の
 具は利の丹別は鉛と洗てうらゆり又煎物も鉛をやして割る
 りの各別法はう別きまありと○鉛は山より取りか湯をいして洗せ
 るやうに大形をうらやうな湯をついてその湯をいして洗せ

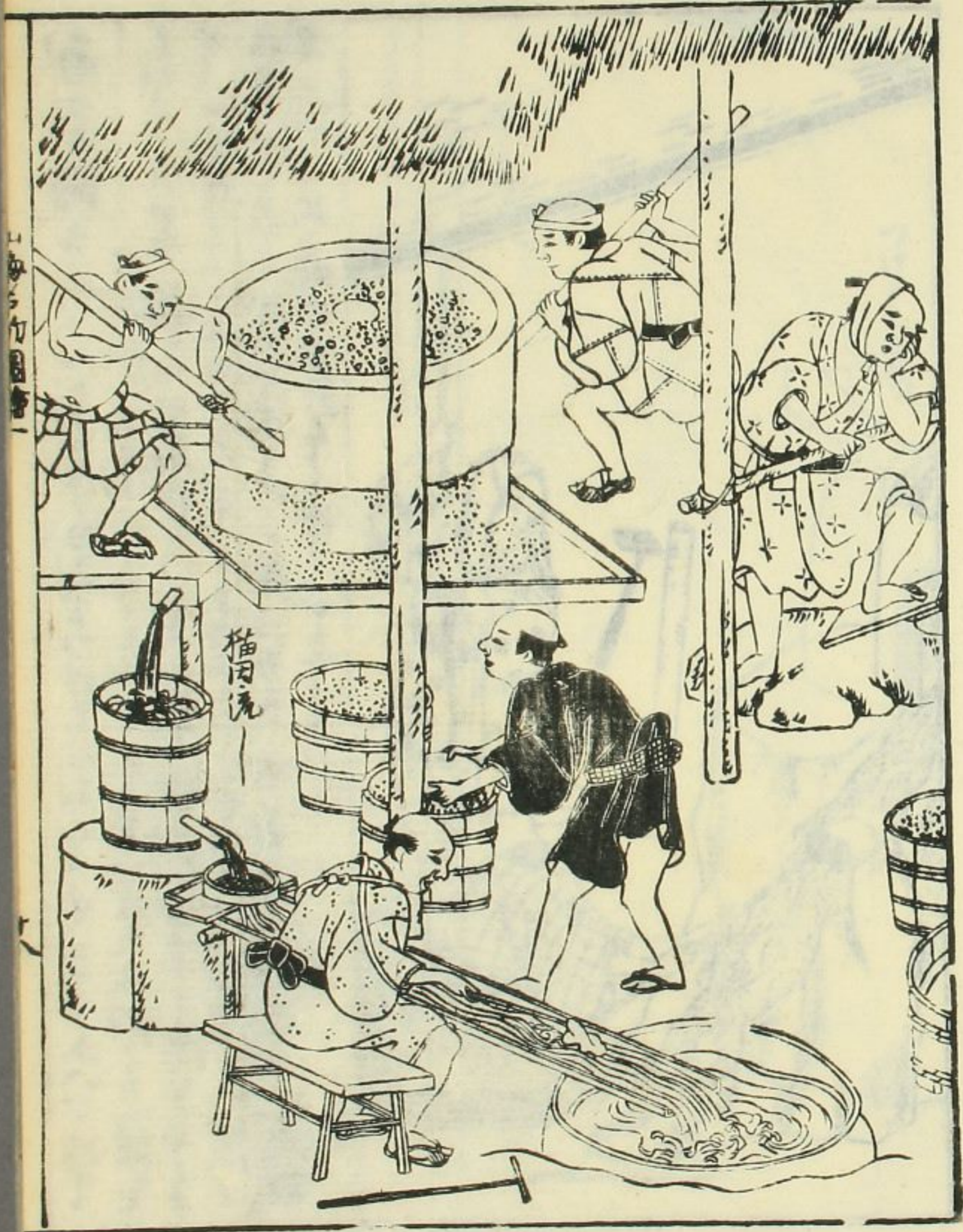
山の上の鉛

十五

真鞠大三石伝

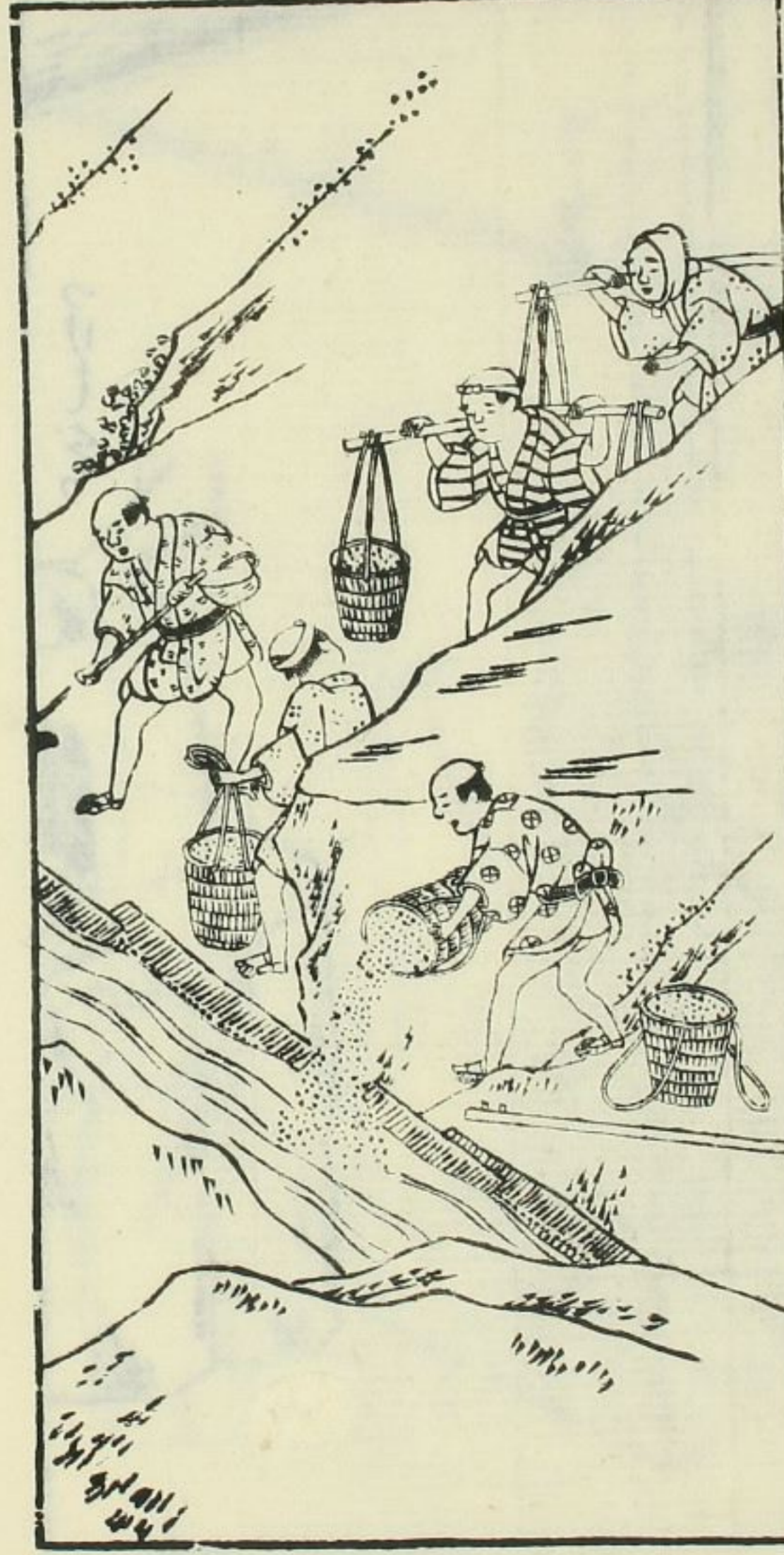
由が地つり六羽より向め懸美とぬらとりて採む
 り子仕あけてうと羽中ぬぐとあどハニ延よんらん
 由ぬやとくうちるはまぶさのトとらん
 古今集大平正の律
 まぬやとく由の中と平子せり細き川乃まものこむけ
 吉伯の甲ハ由中へ今も由平よりあく後とむす





金山陶法
 金山の陶器は、石と土を混ぜて、
 揉みこみ、つぎ猫田で洗ひ、
 その上を板でゆり、
 さらし、
 窯で焼く。

山海名物圖
 七



鉄山の繪 鉄は地がーりたなきにありまきりて鉄をえんたり
 あらき流川よびーろをま肥の上にありざりたるかたを
 まうられば鉄ハ巾のまありおのりなれ許あり○石見 佐中
 佐後のニヶ園をゆく鉄あり佐中にま金ふくとくはる分ありちん
 集子のせりり延在天皇の時時すまは佐中まおろくねと地ありと
 まうらりまねハ金銀鉄の恵ありま鉄ハま金あり

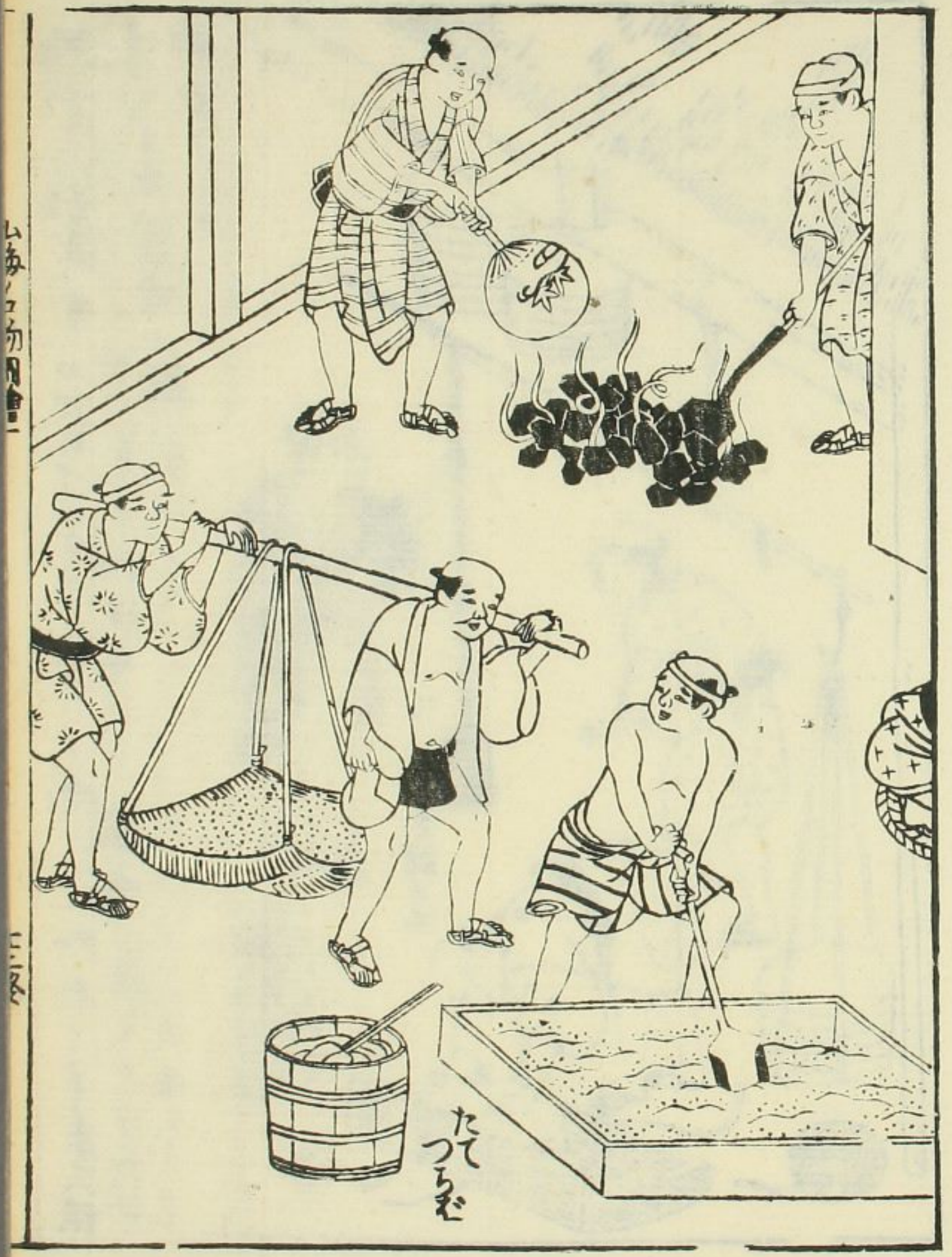


鉄のちら
鉄鑪

鉄鑪とは、湯を煮るに用ひたる器なり。其の形、
 湯を煮るに用ひたる器なり。其の形、

其の形、湯を煮るに用ひたる器なり。其の形、
 湯を煮るに用ひたる器なり。其の形、





いぬいけの用會一

三三

たつら



くらぶ

あやうき
くらぶ

まごい
や

まごい

灰吹
灰吹ハ半紙を南裏吹して紙をちりちりして二枚に
分この尺大を一つして予ん紙を灰吹とて紙の上を紙
粉と云又軟紙とも云余雅子いへく白合あまを紙と予ん紙なる
ものを粉と云又印子と云ハ准南王劉安と合の予ん劉の字を
まごいをらけり合なり續物志まごいなり



羽山^{ハヤ}の死^シ金^{カネ}後^{ノチ}方^{カタ}
 方^{カタ}五^イ車^{シャ}韻^{オン}端^ヘ子^コ銅^{ドウ}ハ^ハ堅^{ツル}鉄^{テツ}なり^{ナリ}と^トあり^{アリ}刀^ヤ紐^ヅと^トつ^ツ力^{チカラ}中^{ナカ}入^イり^リ
 必^{カナラ}金^{カネ}と^トり^リ

ふ^レ死^シあ^ゲげ^レる^ル金^{カネ}を^ヲう^ケり^テ子^コ供^{トシ}り^ク新^ニお^とり^テ東^{トウ}大^{ダイ}坂^{ザカ}
 等^トハ^ハお^とり^テ納^ネ鉄^{テツ}塔^{トウ}目^メハ^ハ銅^{ドウ}鉄^{テツ}ハ^ハ後^{ノチ}を^ヲう^ケり^テきた^キた^タい^ハ
 必^{カナラ}金^{カネ}と^トり^リ

むらさき包^{ムラサキイ}

早稲田大学図書館

011688995061